

研究ノート:「あわてる」の使い方と指導法

内藤 裕子

要旨

「あわてる」の用法の指導に役立てるため、上級の学習者の作った例文をもとに考察し、意味と使い方を考える。

【キーワード】 あわてる、急ぐ、忙しい、類義語、使い分け

1. はじめに

上級の教科書や日本語能力試験のための参考書では、たいていそれぞれの表現や語彙について、だいたいの意味といくつかの例文が示され、練習問題は穴埋めをしたり、文の前半と後半を結びつけたり、自分で例文を作ったりするものが多い。学習者に例文を作らせると、意味はなんとなく通じるが、似た言葉や表現の使い分けができていないことが多い。第一言語は、帰納法的に見聞きした文を応用して作文、発話していると考えられるが、短期間で学ぶ外国語教育では、インプットの量が限られ、二、三の与えられた例文に頼って用法を汲み取ることになり、たまたま正しい例文を作ることができても本当に使えるようになったかどうかの確認は難しい。特に上級の場合、教師が似た表現との使い分けの方法を簡潔に説明し、適切な例文を与えることが、学習を効果的にすると考える。日本語を学ぶ人、教える人のために、いくつかの類義語、類意表現の辞典が出版されているので、教師もできるだけ準備はする。だが、特に教師が目標言語の母語話者の場合、既にその語彙の定義と使用範囲が身につけているため、誤用例を予め想像することが難しく、学習者の誤用例を材料に、初めて見落とされていた新しい定義の発見につながることもある。これらの例文は学習者の母語からの転移であることもあれば、学習者が使用範囲を見極めようと「冒険」し、使えるかどうかの確認を教師に求めている場合もある。本稿では教科書『自然な日本語 II』(1991)を使用した学習者の作った文から、

類似表現に注目し、言葉の使いにくい部分を学び、どう教えるのが効果的なのか考えたい。考察対象の表現は、慌て者の筆者が実はよく理解していなかった「あわてる」である。

2. 教科書の例文と学習者の作った文

以下の T1 から T4 は『自然な日本語 II』（1991）に出ている「あわてる」を使った例文から抜粋したものである。

T1: 「あれは熊じゃないか」と言って、二人はあわててしまいました。(本文)

T2: 空港でパスポートを忘れたのに気がついて、あわてた。(ことばの使い方)

T3: 地震で家具がたおれたので、あわてて外へ出た。(ことばの使い方)

T4: 火事に気がついて、あわてて水をかけました。(すらすら言う練習)

授業では「あわてる」が使われる状況の例を挙げ、日本語で説明した後、「皆さんは今までにどんな時、あわてましたか。」と大体の意味確認をしてから、さらに自由に例文を作らせた。学習者が授業中に作った例文は残念ながら正確な形で残っていないが、宿題や試験の解答の中から選び、本稿に関係のない誤り、部分は割愛して平易に変更したものがS1 からS4 である。ただし、学習者の例S1 からS4 は「ので、あわてて_____。」というように、「あわてて」の後に動詞が使われる用法で文を完成させるよう指示されて作ったものである。「_____ので、あわてた。」より使い方が難しいようで誤りはすべてこの形の方だった。

S1 : こどもは道に迷ったので、あわてて泣き始めた。

S2 : あまり時間がないので、あわてて食べてください。

S3 : お酒を飲みすぎたことがばれたので、あわてて階段から落ちました。

S4 : 朝寝坊して忙しかったので、あわてて歯を磨いた。

学習者が新しい語彙の「あわてる」を使おうとする際、「あわてる」の使い方の誤りと、さらに、既習の「忙しい」「急ぐ」との使い方の違いがはっきりしていないためこのような文が現れたと推測される。

3. 先行研究による語義とその分析

3.1 「あわてる」の意味

「あわてる」の語義を様々な辞書類を参照して、まとめてみる。『似た言葉使い分け辞典』(1991)、『基礎日本語1』(1977)、『日本語学習使い分け辞典』(1994)、『広辞苑』(1982)、『日本国語大辞典』(2002)で「あわてる」の語義を要約し、まとめてみると次のようになる。(資料1参照)

あわてる① 心で感じることを表すことば。自発的現象で意識的にあわてることはできない。思わぬ状況にうろたえ、すべきことは一応わかっているが、冷静さを欠いた状態。マイナス評価の語。

あわてる② 「あわてて・・・する」の形で非常に急ぐ意に用いる。

ここで、2.の教科書の例文に戻って照らし合わせると、T1とT2はあわてる①、T3とT4はあわてる②の使い方の例ということになる。

S3はあわてる②の意味では不適切であるが、「あわてて」の後に句読点をつけて、「あわてる」と「落ちる」を並列にするか、「・・・ばれてあわてたので」というふうに前件を後件の原因にすることにより、あわてる①の意味であることをはっきりさせれば、意味が通る。『基礎日本語1』(1977)では、『あわてて失敗する』のように急ぐことではなく、冷静さを欠くこと。」とあり、形としてはあわてる②であるがあわてる①の意味の例として使われている。日本語の場合、句読点の打ち方があいまいなので、句読点がなく「あわてて・・・する」の形であってもあわてる①の意味になることがある。

3.2 「急ぐ」との違いとあわてる②の落とし穴

次に、「急ぐ」の語義を見てみる。『基礎日本語1』(1977)、『日本語学習使い分け辞典』(1994)、『広辞苑』(1982)、『日本語大辞典』(1989)での語義をまとめると次のようになる。(資料2参照)

急ぐ① ある事柄を早く実現しようと心で準備し、当然、動作、行為のピッチがあがる。ゆとりを切り捨て、手短かにする。「あわてる」「あせる」は無意識的だが、「急ぐ」は意識的。

急ぐ② 急ぐ対象を「を」格で示して、「道を急ぐ」のような他動詞の言い方もできる。

「急ぐ」は意志を持って速く物事をするということだが、2. の T1、T2 のように、あわてる①の意味では意識的に「あわてる」ことはできないことがわかる。一方、T3、T4 のように、あわてる②の意味でも「あせって冷静さを欠いた様子で～する」という意味で、客観的にどのような様子で行動しているのかを観察している話し手の「目」（外からの描写）があり、わざとあわてふためいた様子で動作を行うわけではない。しかしながら、動作主が意識的に急いでいる時に使われるようである。とすれば、あわてる②は「あわてて」の後に続く動作は無意識ではなく、急いでする意志をもって行うことになり、「あわてる」が副詞的に使われると、自然発生的なあわてる①とはかなり意味が変わることになる。

3.3 「忙しい」の意味

ここで「あわてる」と「忙しい」の共起の問題を考えるために、『基礎日本語1』（1977）、『日本語学習使い分け辞典』（1994）、『広辞苑』（1982）、『日本語大辞典』（1989）での語義を参考に、「忙しい」の定義をまとめる。（資料3参照）

忙しい① ある時期、ある場所などで、人がしなければならないことが多く暇がない状態。多忙である。

忙しい② 急いでしなければならないことが次々とあって、気がせいて、ゆっくりできない人の心の状態。

忙しい①は人の置かれた状況の描写、忙しい②は人の心理状態の描写に使われる。

4. 学習者の例文の分析

ここで学習者の作った例をどう添削し、どう説明するか考える。

学習者の文 S1: こどもは道に迷ったので、あわてて泣き始めた。

こどもが主語で「泣き始めた」ということから、学習者が「道に迷った」と書いたのは、「迷子になった」の意味だった可能性もある。しかし、どちらにしても、あ

わてる①の時はただ泣くのではなく、なにか方策を探そうとしているはずであるし、あわてる②であれば、急いで意識的に泣き始めることになり、違和感が残る。

S1-1, 2 は添削例である。

添削例 S1-1: こどもは道に迷ったので、あわてて(しまって)、(それから)泣き始めた。(あわてる①の用法)

添削例 S1-2: こどもは道に迷ったので、あわてて地図を探した。(あわてる②の用法)

S1-1 は、「あわてる」と「泣き始める」を同列に置き、あわてる②の用法ではないことをはっきりさせた。S1-2 は急いで意図をもってする行動に置き替えた。次のS2 も同様に「あわてて」の後に句読点を入れるか、S2-1 のようにすればはっきりする。

学習者の文 S2: お酒を飲みすぎたことがばれたので、あわてて階段から落ちました。

添削例 S2-1: お酒を飲みすぎたことがばれてあわてたので、階段から落ちました。

次の例は要求文になっている。

学習者の文 S3: あまり時間がないので、あわてて食べてください。

あわてる②の意味では、早く事柄を実現しようと心で準備をして臨むのだが、そのうろたえ、あせる様子はわざとするわけではないので、聞き手に要求したり、話し手の意志を表すのには適さない。S3-1 のように驚いて騒ぎまどいながら急いで食べた事実とするか、「急ぐ」を使って、S3-2 のように聞き手がコントロールできる表現にする。ただし、「あわてずに」あるいは「あわてないで」と否定形にすると動作主が冷静さを保つよう制御していることになるので、S3-3 のように意志や要求を表すことができる。

添削例 S3-1: あまり時間がないので、あわてて食べた。

添削例 S3-2: あまり時間がないので、急いで食べてください。

添削例 S3-3: あまり時間がないので、むせないようにあわてずに食べよう。

最後に「忙しい」との共起がしっくりいかない場合を考える。

学習者の文 S4: 朝寝坊して忙しかったので、あわてて歯を磨いた。

添削例 S4-1: 朝寝坊して忙しかったので、急いで歯を磨いた。

添削例 S4-2: 朝寝坊して時間がなかったので、あわてて歯を磨いた。

添削例 S4-3: 朝寝坊して忙しかったので、あわてて、歯を磨くのを忘れた。(あわてる①の用法)

S4 が忙しい②の用法で、「気がせく」の意味であれば、雑かもしれないが、ひどく急いで歯を磨いた意味として通る。しかし、読み手が忙しい①の用法で、「すべきことが多かった状態」と捕らえると、歯を磨くことだけうろたえて急ぐという様子は不自然に聞こえる。「忙しかった」という状態が、理性を失うほどまごつく理由にはならないのだろうか。そこで、S4-1 のように「あわてて」を「急いで」に替える。あるいは S4-2 のように、時間がないことに気づいた時点で、驚き、落ち着きを失ったまま、まずひどく急いで歯を磨いたとするなら、「あわてて」が残せる。S4-3 はあわてる①の用法である。

5. 学習者への説明のためのまとめ

「あわてる」を教えるために、注意すべき点をまとめておく。

「あわてる」の「て形」は、①独立した動詞として使われているのか、②次に続く動作の行われる様子を表し、副詞的に使われているのかで意味、用法が異なるが、日本語では句読点の打ち方があいまいなので、形だけでは判断が難しいものは文脈から判断する。

あわてる①は急な状況の変化に驚き、冷静さを欠く。意識的にあわてることはできない。②のような形、「あわてて～する」の形でも、狼狽して、その結果何か良くないことが起こるという意味になる時は①の用法である。

あわてる②の用法は①のように冷静さを欠いていると同時に、これをしなければとひどく急いで行動する時に使う。あわてる様子はコントロールできず無意識にそうなるのだが、行動自体は意識的である。無意識の場合は①の用法になる。ただし、冷静を保つように努力する場合は「あわてず避難してください」のように、否定形で次の行動を修飾することができる。

「急いで～する」は、物事を早く実現しようと冷静に努力する点が、あわてる②

と異なる。

「あわてる」の理由として「忙しい」と使う時は注意する。忙しい②は時間がなくて気がせくという意味で使われるが、忙しい①の、すべき用事が多い状態の意味の方に解釈される頻度が高いので、突発的にうろたえてしまうような理由にはなりにくい。むしろ、すべき事柄がわかっているので、冷静に要領よく「急いで」済ませる方が自然である。「あわてる」には「びっくりさせる何か」が起こらなければならないのである。

参考文献

- 梅棹忠夫他（1989）『日本語大辞典』講談社
桜井晴美（1991）『自然な日本語 II』凡人社
小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』（2002）小学館
新村出（1982）『広辞苑』岩波書店
広瀬正宜/庄司香久子（1994）『日本語学習使い分け辞典』講談社
森田良行（1977a）『基礎日本語 1』角川書店
類語研究会（1991）『似た言葉使い分け辞典』創拓社

資料 1

あわてる

a. 『似た言葉使い分け辞典』(1991)

すべきことは一応わかっているけれども、あせって落ち着きを失っている。「うろたえる」はどうすべきか分からず焦り困惑している場合に使う。例：遅刻しそうになり慌てる。財布を忘れて慌てる。

b. 『基礎日本語 1』(1977)

自発的現象。意識的にあわてることはできない。思わぬ事態、心の準備ができていない状況が突発して驚きまごつくこと。“精神的うろたえ、理性を失った状態”の気持ちが伴う。「あわてて失敗する」のように急ぐことではなく、冷静さを欠くこと。マイナス評価の語。

c. 『日本語学習使い分け辞典』(1994)

(心で感じることを表すことば) 思いもよらないことが起きてしまい、どうしようかとうろたえたり、冷静さを欠いて行動するというとき使う。気持ちが混乱したとき使う。例：さいふを忘れてあわてて取りにもどった。地震のとき、あわてて外に飛び出すのは危険だ。彼女はどんなときもあわてないで落ち着いた行動がとれる人だ。 to panic; to get flustered; to rush

d. 『広辞苑』(1982)

① (何をしてよいか分らず) うろたえさわぐ。驚いてさわぎまどう。② (「あわてて・・・する」の形で) ひどく急ぐ。

e. 『日本語大辞典』(1989)

おどろき、うろたえる。 be confused

f. 『日本国語大辞典』(2002)

不意をつかれて落ち着きを失う。びっくりしてまごつく。うろたえる。狼狽する。現代では「あわてて・・・する」の形で非常に急ぐ意に用いる。

資料 2

いそぐ

a. 『基礎日本語 1』 (1977)

〈自・他〉ある事柄を早く完了・成立させようと行為の進行速度を上げようとする。

①“心で準備する”こと。その事柄の成立をより早く実現しようと心でそのつもりになること。当然、動作・行為のピッチがあがる。例：急ぎなさい。

具体的に動作・行動を示し、速く行おうとする場合には「急いで・・・する」の形を用いる。瞬間動詞の場合はその動作をできるだけ早い機会に行うよう努力する。「大急ぎで」に相当する。「食事を済ませて急いで出かけた」一方、継続動詞が立つと、短い時間片付けるよう意識して事を行う。一つの事柄にあまり時間をかけないで済ます意識である。「急いで手短かに話す」

「速く話す」は物理的にスピードを上げることで、「急いで」の“ゆとりを切り捨て、簡潔に、要領よく、手短かに”という精神的ピッチの速さとは異なる。

②「急ぐ」の対象を「を」格で示して、「道を急ぐ」のような他動詞の言い方もできる。「話を急ぐ」は話を速く済ませて、次の話に早く移るようにすること。

b. 『日本語学習使い分け辞典』 (1994)

(動きを表すことば) 短い時間で物事をしよう、早く終わらせようとする時使う。「あわてる」「あせる」は無意識的だが、「急ぐ」は意識的、つまり、自分でそうしよう考えて行動する時使う。例：急いで帰ろう。急いで間に合う。to hurry

c. 『広辞苑』 (1982) 〈自・他〉

①物事を早く成しとげようとか、目的地に早く到着しようとかする。せく。

②支度する。準備する。

d. 『日本語大辞典』 (1989)

①目的地に早く着こうとする。早く歩く。walk fast

②速さを増す。速くしようとする。hurry

資料 3

いそがしい

a. 『基礎日本語 1』 (1977)

急いでしなければならないことが次々と起こって、ゆっくりできない状態。本来は、人間がある目的意識から多くの用事を抱え込み（本意・不本意にかかわらず）、それに追いまくられて休むひまのない状態に使う。当然人が主体となって「試験前で忙しい」のように言う。忙しい内容を「が」格に立てて、「(私は) 仕事が忙しい」「忙しい職場」など。さらに、人間を離れて、ある状況・情勢がめまぐるしく動き、差し迫っている状態に比喩的に転用される。「資金繰りが忙しい」

「忙しい」はその主体の属性として定着する。「忙しい男だ」は“多忙”の意とも、“落ち着きがなくせかせか動き回るたち」とも解せる。

b. 『日本語学習使い分け辞典』 (1994)

しなければならないことがたくさんあって暇がないこと。busy

c. 『広辞苑』 (1982)

① 急がずにはいられない。落ち着かない。

② ひまがない。用が多い。多忙である。

d. 『日本語大辞典』 (1989)

① せわしい。ひまがない。多忙だ。busy

② 落ち着きがない。気がせく。restless